

随想

HACCPとは

～食べ物だけがHACCP対象ではない！～

加藤 宏光

先日、(二〇一三年八月二十一日以降、関連記事がしばしば報道されている)東電の福島原発事故跡から三〇〇トの汚染水が漏れ出たという報道がなされた。東電の基本的な姿勢は事故当初から無責任の感が否めなかった(先日食道癌で亡くなられた、故吉田前福島原発所長の孤軍奮闘が僅かな救いとなった)。

今回、三〇〇トもの汚染水が漏れたこともしかることながら、その事実が長期にわたってわからなかったことは、さらに東電への不信感を煽る。

中でも汚染水の貯蔵タンクに貯蔵量のメーター類がなかったために貯蔵量が減じていることが長期にわたってわからず、たまたまの点検時にタンクの製造

に際してできる鉄板の繋ぎ目から水漏れしていることから、中のぞいて量が減じていることが判明した、という。このタンクは一基で三〇〇ト貯蔵でき、総数で約一、〇〇〇基が設置されている。そのうちの三基で漏れたそうだが、等量漏れたとして一基一〇〇ト、つまり三分の一も水量が減っていたことになる。

確かに《約一、〇〇〇基ものタンクをどう管理するか》は大変な課題であろう。しかし、世界でも注目されている原発事故の後処理である。起きうるリスクを十二分に検証して作業をすすめる、管理すべきであることはいうまでもあるまい。

著者は本誌の連載で、生産現場で有効なHACCPシステム

の導入について述べている。HACCPシステムの導入に際して一二手順、それに含まれる七項目について解説している。HACCPシステムを生かすために最初になすべきは危害因子(リスクファクター)を適性に設定することである。

原発で最も大きなリスクファクターは放射能であり、これを一〇〇% (現実には不可能) 封じ込めることを前提として原発は稼働している。今回、福島原発事故に際して、当事者である《東電経営陣》《当時の行政担当―前首相や幹事長等》には、東日本大震災によって引き起こされた津波のレベルが想定外で不可抗力であった、との検察の判断で送検されなかった。つま

り、事件性はなかったと判断されたのである。

東日本大震災によって引き起こされた津波は不可抗力であったとしても、その後の処理は不可抗力ではあるまい。全国をコントロールすべき極めて大きな責任を有するはずの、時の首相自身が理科系であることを自認するが故に(と一部に報道されているし、公開ビデオを踏まえた言動はそれを裏付けていると思う)、官邸を離れて福島原発事故現場上空をヘリコプターで視察する、という行動は国全体をコントロール不能にするとてもないリスクであるし、また事故の現実を隠して明らかにしようとし(ように思えてならない)前幹事長や東電幹部の

姿勢には《当事者責任》を認識せず、それ故にこれも非常なリスク要因を含んでいた。さまざまな方々の献身的な努力でなんとか現状までこぎ着けたところで、放射能汚染水の大量リークはないだろう！

八月二十六日の朝日新聞六面にはこの汚染水に由来する海水の放射線レベルが八倍から数十倍に跳ね上がったことが記載されているし、また八月二十三日の記事に《せっかく始まった試験的な漁を汚染と風評を恐れるため中止する》という。

福島県の農水産物は事故以来風評被害に悩まされている。かつての茨城原燃事故で、地域の農産物にはほとんど値段が付かないほどの風評被害が発生し、近隣の名前が入った段ボール箱の値段が高騰したという。

原発事故の直接被害で福島県の採卵養鶏羽数約四五〇万羽のうち一二〇万羽が淘汰された。それらの再生は、いまだにめどが立っていない。それらの中には《福島県産というだけで買手

が付かない》という言い訳で中間業者が流通に積極的に取り組まないという事情があるという(生産者談)。補償がなされているから高をくくっているのか、近頃東電・行政の姿勢には真剣味がとみに薄れているように感じられてならない。

HACCPSシステムとは危機分析と危機を回避するために構成されるシステムであり、今回の危害要因は放射能に限定される。放射能を振り撒く可能性のある要因には種々の汚染物質があるが、その最たるモノが汚染水であり、汚染された水を三万ト以上一か所に貯めていることと自体が危機的状態といえる。そして、貯蔵タンクを「仮置き場」としている。仮置き場という言葉で極めて一過性であるとかモフラーージュしている、といわれても反論できまい。タンクの寿命が五年程度ということも《仮置きするだけだから》という言葉の方便でよしとされたのではないか？ 仮置きを前提として、本格的にどう処理し、ど

こへ置くのか、明らかではない。そして、設置から二年ほどで《汚染水漏れ》の事実である。

当事者は多分「五年の耐久性を前提として設置した。二年で水漏れは《想定外》」ということであろう(想定外は原発事故が大震災と大津波で起きた時に東電責任者が頻用した、便利な言葉である)。想定外であることは、配電板にネズミが入り込んだために循環冷却水のポンプが止まった時にも「だから仕方なかった」と言わんばかりに説明に使われた。この時も《簡単にネズミが入り込む構造をチェックしていなかったこと》に対する責任を誰が負ったのだろうか？ 今回のタンク異常について、それぞれのタンクに簡単なレベルゲージも付いていなかったと聞いている。配電板が密閉された箱に格納されていなかったことと類似のミスである。

HACCPSシステムが有効に働くためには①危害の設定と②危機管理ポイントの設定がまず基本であり、これが完璧でなけ

ればいかに努力しても危機を回避することはできない。

世界を揺るがせた原発事故を、どのように安全に切り抜けるか、世界が注目している。現に、福島空港へやっとなつてきた韓国・アジア航空のチャーター便は、放射能汚染を恐れて渡航者が減少し経済的に維持できない、として閉鎖されてしまった。せっかく《八重の桜ブーム》で少し解けかかった風評被害は一瞬で戻ってしまった感がある。

原発とHACCPSシステムを結び付けて考える人がどの程度いるのか著者は知らない。しかし、今そこにある危機を回避するために、システムティックにシステムを組んでいるとは思えない東電や中央行政の姿勢には《その実態が明確にわからない》という条件を加味しても、いままじし確な対応法があったはずだ、と思われてならない。

HACCPSシステムを生産の現場に持ち込みつつある採卵養鶏産業界自身、他山の石とすべき教訓としたいものである。